

令和元年6月11日現在

機関番号：34533

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17282

研究課題名（和文）終末期ケアにおける多職種連携 - ソーシャルワーカーのコンピテンシーに関する研究 -

研究課題名（英文）Interprofessional Work in End-of-Life Care :A Study on Social Workers competency

研究代表者

上山崎 悦代 (KAMIYAMASAKI, Etsuyo)

兵庫医療大学・共通教育センター・講師

研究者番号：80711655

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：現任のソーシャルワーカー（SWer）や多職種に対する調査を行い、終末期ケアにおける多職種連携（IPW）でのSWerの役割とコンピテンシーを整理した。SWerは地域を基盤とした院内外への積極的な働きかけやIPWを下支えする役割を担っていた一方で、積極的な関わりが持ちづらいというジレンマを感じており、終末期ケアにおける多職種連携に関する教育機会を整備する必要性が示唆された。ソーシャルワーカーを対象とする教育プログラムを開発し、試行、評価したところ、本プログラムが新たな気づき等を得る機会となっており、一定の学習効果を確認することができたが、課題も残った。今後は継続した教育機会の創出が必要となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地域包括ケア時代において多職種連携（IPW）は不可欠である。しかし、終末期ケアにおける多職種連携に関しソーシャルワーカー（SWer）が果たす役割やコンピテンシーを示した研究は少ない。本研究では、SWerの果たす幅広く多様な役割やコンピテンシーを明示することができた。また、教育プログラムの開発・試行を通して、今後の整備・充実に向けた課題を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Research on active social workers and multiple professions was conducted to organize the roles of social workers and competency in interprofessional work (IPW) for End-of-Life Care. It found that social workers played a role in actively promoting IPW in and out of the hospital based on the community and supporting IPW. On the other hand, there is the dilemma of difficulty with active involvement, suggesting the necessity for End-of-Life Care education. Thus, educational programs for social workers were developed and trial workshops held. Brief assessments have indicated that the workshop provided an opportunity for social workers to gain new subjects and further awareness, confirming certain learning effects, but challenges remain. Hereafter, sustained creation of educational opportunities will be required.

研究分野：社会福祉学

キーワード：終末期ケア 多職種連携 ソーシャルワーカー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

多死社会の到来により、人生の最終段階におけるケア（以下、終末期ケア）の質が問われている。同時に、地域包括ケアシステムの構築が進められる中で、看取りを含めた終末期ケアを実践する場もより多様化することが予想される。

また、「住み慣れた地域で人生の最期まで尊厳をもって自分らしい生活を送ることができる社会の実現」という地域包括ケアの考えでは、医療・介護・生活支援等が一体的に提供されることから、多職種連携（Interprofessional Work）; IPW）が前提となる。厚生労働省は「終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン」で、終末期医療における医療行為に関しては多専門職種から構成されるチームにより判断されるべき、と示しているが、これは医療に限らず生活支援を含む終末期ケアにおいても同様と考えられる。従って、IPW の実践なしに終末期ケアを展開することはできず、IPW の質がケアの質を決定づけるとも言える。

IPW は、チーム医療として病院等の医療現場を中心に展開されてきた。2000 年以降は、IPW 実践の大きな広がりが見られ、研究成果の報告や論文も年々増加している。しかし、過去に調査した結果を見ると、その多くは医療職によるもので福祉職からの発信は数少ない。ケア従事者の多数が医療職という実態はあるものの、特別養護老人ホームや在宅といった生活・暮らしの場における終末期ケアの増加が想定されるならば、もっと多くの福祉職による発信があってもよいのではないかと考えた。一方で、福祉職にとって終末期ケアとは馴染みが薄く、看取りケアへの恐れや自信が持てない状況も散見される。在宅を含め多様な場で展開する終末期ケアでは、ソーシャルワーカー（以下、SWer）をはじめとした福祉職を含めた質の高い IPW が欠かせないだろう。

以上のことから、SWer は、果たして終末期ケアにおける IPW において必要とされる存在となりうるのだろうかという問題認識のもと、本研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究の目的は、終末期ケアにおける多職種連携・協働を行ううえでのソーシャルワーカーの役割とコンピテンシーを明らかにし、必要とされる研修プログラムを開発することである。そのため、以下の 2 つの研究課題に取り組む。

研究課題 1：SWer が担う役割とコンピテンシーの分析

終末期ケアにおいて SWer がどのような役割を担い、そこで必要とされるコンピテンシーとは何かについて、IPW をキー概念として明らかにする。

研究課題 2：終末期ケアを担う SWer 向けの研修プログラム開発

必要な役割やコンピテンシーが明らかになれば、それを習熟するための教育が欠かせない。そこで、終末期ケアにおける SWer のコンピテンシーを高める研修プログラムを開発する。

3. 研究の方法

研究課題 1 では、2 つの調査を実施した（調査 1、調査 2）。

調査 1：医療機関の SWer を対象とした個別インタビュー調査

調査 2：多機関多施設の SWer に対するグループインタビュー調査

研究課題 2 では、2 つ調査を実施した（調査 3、調査 4）。

調査 3：特別養護老人ホームで終末期ケアに従事する多職種への質問紙・個別インタビュー調査

調査 4：各種調査を踏まえた研修プログラムの開発、試行、評価

4. 研究成果

4 つの調査から得られた研究成果として、以下の 4 点にまとめられる。

(1) 医療機関の SWer を対象とした個別インタビュー調査（調査 1）

同一医療圏域内にある急性期型 A 病院とケアミックス型 B 病院の SWer 2 名を対象に、「IPW における SWer としての工夫」、「SWer として感じる IPW の課題」、「IPW を推進するために今後取り組みたいことや要望」の 3 点についてインタビュー調査し、内容分析を行った。

A 病院での IPW における SWer としての工夫として抽出できた項目は、「豊かで多様な連携力」、「ケアの中心的作用を果たす看護師への支え」、「SWer として独自の役割」、「院内スタッフへの積極的な働きかけ」、「他の専門職の視点を大切にすること」という 5 点であった。一方の SWer として感じる IPW の課題は、「消極的な関わりになりがちになる SWer」、「連携を困難にする専門性の違い」、「SWer としてのジレンマ」の 3 点であった。IPW を推進するために今後取り組みたいことや要望については、「医学・医療に対する教育機会の脆弱さ」と「充実した教育機会のニーズ」を確認できた。B 病院では、IPW における SWer としての工夫として、「SWer の専門性を発揮する支援体制が確立していること」、「看護師が中心となるケア体制を支える」、「円滑な連携のために働きかける SWer」、「SWer の目指すべき支援のあり方を考え続ける」の 4 点、SWer として感じる IPW の課題が、「積極的に終末期ケアに関われない現状」、「終末期ケアに対する優先度の低さ」、「生活の場となっている療養病棟」、「IPW のイメージが持たれていない医療療養病棟」の 4 点を確認できた。IPW の推進のために取り組みたいことは、「脆弱な終末期ケアに関する学びの場」が確保されることとなっていた。以上の結果を踏まえ、終末期ケアの特徴を踏

また IPW を展開に関する「SWer としての専門性の発揮」3 点と「専門性の発揮を困難にする要因」2 点の 5 点について考察した。

1 点目は、SWer 独自の役割を担うことである。ここでは、生活面での特別なニーズに対応しながら、社会資源の有無に捉われずに奔走する SWer の姿があり、自己決定を尊重し前向きに看取り看取られるような本人及び家族への働きかけをしていた。特に、社会的背景が複雑で特別な支援が必要な場合、他の専門職からの要請に応じ、SWer が院内で定着しながら自らの専門性を発揮していた。

2 点目は、看護師を中心としたケア体制への協働である。2 病院共に、看護師長やがん相談支援センターのがん看護認定看護師などの看護職によるイニシアチブを発揮したケア体制が構築されており、SWer は看護師と歩みをともしながら必要な支援を行っていた。終末期では、日々状況が変わる中で、医療者からの介入頻度も高くなる。刻々と変わる状況下で SWer が柔軟に介入しながら、患者のより細やかなニーズに対応できるケアにつなげていたと考えられる。

3 点目は、地域を基盤とした院内外への積極的な働きかけである。SWer は、院内スタッフへ積極的に働きかけつつ、院外関係者との円滑な連携のために奔走していた。特に、地域の様々な多職種と関わる窓口になるのはソーシャルワーカーという役割を強く自覚し、病院が地域の中の一資源として存在していることを認識して積極的に地域に向けて働きかけていることが確認された。終末期ケアの場が多様化することが予想される中、地域ベースで活動することを得意とする SWer の参画が重要度を増すことにもつながると考えられる。

4 点目は、消極的な関わりに留まるという認識である。病院の機能に関わらず、終末期ケアには積極的に関われない SWer の苦悩が導き出された。その要因として、SWer に来ることは限られており他者から積極的な役割を期待されていないと感じていたことが挙げられる。

5 点目は、脆弱な教育機会である。消極的な関わりに終始せざるを得ない背景として、教育機会の脆弱さがあげられる。ソーシャルワーカーの専門職養成教育（社会福祉士養成教育）を概観しても、終末期ケアに対する学びの機会は少なく、更に現任者教育も一部の関係団体による研修が設けられているに留まっている。終末期ケアに対する教育体制が脆弱なうえ、IPW を理解する機会はかなり少ないことが推察された。教育機会を整備、強化することは、終末期ケアの IPW を促進させるうえでの重要な課題であると考えられた。

本調査では、様々な場面でチームの一員として終末期ケアに関わり、固有の役割を担いながら IPW に貢献する SWer の姿を確認できた。一方で、あまり多くを求められていない状況も散見されたことから、SWer 不在であっても終末期ケアは十分に展開できるのではないかという問いも生じた。しかしながら、ソーシャルワーク専門職のグローバル定義にも見られる社会変革や社会改良を志向することは、調査から抽出できた、地域社会への働きかけや地域関係機関との IPW を促進することでもあり、地域包括ケア時代を迎える今日の実情にも合致するだろう。常に地域を見据えながら、患者・家族の自己決定を支え続ける福祉職としての視点で連携する SWer の姿は、個別のケースはもちろん、当該地域全体における終末期ケアの IPW に貢献しうると思われる。

（2）調査 2：多機関多施設の SWer に対するグループインタビュー調査（調査 2）

本調査は、調査 1 から対象をさらに広げ、居宅ケア関連施設、介護保険施設、医療機関の SWer5 名を対象として実施した。終末期ケアの場が多岐にわたることを考え、出来るかぎり多様性が担保されるよう急性期から在宅ケアまで包含することを企図している。調査内容は、終末期ケアの IPW で SWer として工夫している点や課題、IPW において他の職種から SWer に求められていると思うこと、終末期ケアの IPW を推進するために SWer に必要な教育・研修についての 3 点である。

逐語録の内容分析の結果、199 のコード、39 のサブカテゴリーで構成する 11 のカテゴリーを生成した。それを踏まえ、SWer の役割を 3 つの点から考察した。

1 点目は、「医療職とは異なる立ち位置で関わる SWer の存在意義」である。SWer が行っていたことのひとつに、本人、特に家族に対して丁寧に関わる支援があった。本人への直接的ケアが他の職種と比して少ない分、本人を取り巻く環境、とりわけ家族に対するサポートを細やかに実践していたと考えられる。終末期にある本人の傍に寄り添う家族だからこそ抱える不安に寄り添い、意見が異なる家族間の調整や家族内の危機に介入しながら、家族・本人を包括的に支えるという環境への働きかけが抽出できた。さらに、医療的ケアが増える終末期においては今後の見通しも含めた不安や相談事が増えてくるが、「本人・家族は医療職に大勢囲まれると自分たちが本当に伝えなかったことが言えなかつたりすることがある」状況からも、医療職に対して本心を伝えることができないクライアント像が見えてくる。そこでは SWer が、本人・家族に代わって医療職に様々なことを伝え、一方で医療職の考えを本人・家族の特性に合わせた形で届けるサポートをしていた。

2 点目は、「IPW を下支えし地域や社会に働きかける役割」である。SWer は、多職種とのつながりを大切に、より良い多職種連携のために各方面に働きかけをしていた。例えば、在宅看取りのための地ならしをしながら、細やかな環境整備をしている。これらは地味で目立たないかもしれないが、医療職が本人・家族に働きかけがしやすいように整える、いわば「IPW を下支えする職種」がいることは、円滑 IPW には有用なことと考えられた。さらに、地域の各関係機関との調整役となって様々な社会資源をつなぐことができるのも SWer の強みである。フォー

マル、インフォーマルを問わず、多様な社会資源と繋がることは、自らの所属する組織内の連携だけでなく組織外との連携を広げることとなる。各方面に顔の見える関係を作っておくことで本人・家族に必要なものを届けることができ、同時に、繋がっていない社会資源があれば新しく作り上げるように働きかけることが必要で、これは SWer が大切にしてきた専門性の一つでもある。本調査でも「なんでもできることが自分たちの強み」として、幅を広げて多様な人や場につながり、新たな資源などを作っていこうとする SWer の実践が見て取れた。終末期ケアにおける IPW の場面においては、マイクロレベルだけでなく、メゾレベル・マクロレベルでの SWer の役割の広がりが予想される。

3 点目は、終末期ケアに関する教育の機会の必要性である。本調査対象者は、終末期ケアの IPW を展開するための力量が不足すると感じ、力量を高めるための場が必要と考えていた。今回の結果のみをピックアップして考えることはできないものの、終末期ケアについて体系的に学ぶ機会が少なく自信をもって積極的に終末期ケアに関わりづらいという SWer のジレンマが見えてきた。どのような教育方法や内容、場の設定が良いかについては要検討であるが、今回の調査では多職種で意見を共有する場を大切にする声が多く、これは複数の先行研究とも共通している。多職種で学びあうということは、多職種連携教育 (Interprofessional Education=IPE) として展開できる可能性が示唆される。IPE は「専門職間の協働とケアの質を高めるために、2 つ以上の専門職が、お互いからお互いについて学び合う機会」(The UK Centre for the Advancement of Interprofessional Education : CAIPE (2002)) とされているが、特別な IPE の場を設定するというよりも、日々の IPW の場を IPE としても展開できると思われる。具体的には、日常の終末期ケアを主題とした多職種でのカンファレンスや事例検討会などを通して、SWer に対する終末期ケアの教育機会が整えられる必要があるだろう。

本調査でも、多様な SWer の役割とそこで発揮されるコンピテンシーを抽出できた。とりわけ、SWer には「なんでもできるからこそ何をすべきか」を吟味する力が必要となる。その理解を深めるための教育の場と教育プログラム開発の必要性を確認することができた。

(3) 特別養護老人ホームの多職種に対する質問紙・個別インタビュー調査 (調査3)

本調査は、特別養護老人ホームに勤務する多職種 11 名に対する質問紙と 5 名へのインタビューによる調査で構成している。調査対象者は、1 年にわたり 3 回実施した「多職種参加型の振り返りカンファレンス」に参加していたため、当該カンファレンスの評価を確認するために 2 つの調査を実施した。各回終了後すぐに実施した質問紙調査では、単純集計の分析とクラスター分析を行った。インタビュー調査は、3 回のカンファレンス終了後更に半年経過した時点で、調査協力可能な多職種を対象に行った。調査結果で明らかになったのは、以下の 3 点である。

1 点目として、カンファレンスを複数回継続して実施することによる効果である。質問紙調査の結果では、カンファレンスの満足度、他者に対する疑問の投げかけ、多様な対応先の提案、事例を振り返ることに関し、1 回目より 3 回目のほうが有意に高い効果を示していた。これは、参加者自身の能動的な取り組みが影響しており、回数を重ねることでディスカッションの場に慣れ学びを深めた結果と想定された。

2 点目として、カンファレンスの成果は一様ではなく、職種による違いが確認できたことである。クラスター分析により、ケアチームに対する気づきや変化の度合いを見たところ、SWer は介護職や看護職と比して大きな変化は見られなかった。さらに、日々のケア実践上での活用や変化を確認すると、介護職はカンファレンスの成果を活用し実践に自信を高める大きな変化が見られた一方で、SWer は実践上の変化は実感していたが介護職ほどの自信の高まりは見られなかった。これは、SWer にカンファレンスの成果が見られなかったということではなく、成果の現れ方は職種によって異なるということだと考えられる。そのため、カンファレンスなどの学び合いの機会を設ける際は、これらを考慮する必要性が示唆された。

3 点目は、カンファレンスの参加により、他の職種の考えや役割に対する理解の深化や看取りケアに対する意識・行動の変化が確認できたことである。インタビュー調査で語られた内容を丁寧に分析すると、他の職種に対する理解や配慮の深まりや、看取りケアに対する意識や行動の良い変化が見られた。一方で、職種による考えの違いによる連携上の困難なども浮き彫りとなった。

以上のことから、カンファレンスが多職種連携を促進できる可能性を確認できた。さらに、当該施設での看取りケアの実践をよく見ると、良い行動変容が、個人からケアチーム、ケアチームから組織へと展開しており、組織全体の底上げに繋がっている可能性が示唆された。一方で、カンファレンスに対する評価は一様ではなく、職種による違いなどに考慮する必要性も確認できた。本調査は 1 施設の多職種を対象としたものであることから一般化はできないものの、IPW を主眼とした専門職向け教育プログラムのあり方を検討する一助となった。

(4) 研修プログラムの開発、試行、評価 (調査4)

これまでの調査 (調査1、調査2、調査3) の結果を踏まえ、SWer を対象とした教育プログラムを開発し、実際に試行したうえで評価を行った。

開発にあたっては、終末期ケアの学びを深めるためには学習者の感情や価値観を通わせることができる少人数での学習環境を設定することが必要だと考えた。加えて、SWer 同士が忌憚なく意見を出し合える場、互いに共感しあえる場づくりが重要と考え、10 名未満の小グループで

自由闊達なディスカッションができる形式でのプログラムを準備した。また、現任者対象の教育機会であることから、日常業務への影響や負担感を最小限とするために短時間で理解が深まるショートケース（事例）を用いた。ショートケースは、これまでのインタビュー調査などから語られた内容を基にオリジナルのものを用いた。本調査では、終末期ケアの IPW において、SWer が比較的良好に関わる場面を想定した。

試行として、SWer 対象の研修会を企画し実施した。具体的には、調査 2 の協力者を中心に参加者を募り 7 名の参加者があった。これまでの調査では、SWer を対象とした教育で終末期ケアを取り扱うことは少ないことが分かっているが、実際、本研修の参加者のほとんどはこのような機会を経験していなかった。60 分の研修会で 2 つの事例を取り上げ、研究代表者がファシリテーターとして、ディスカッションの舵取りを行った。

評価に関しては、研修会終了後に質問紙調査を実施した。参加者全員が終末期ケアでの IPW に関する気付きを得られており、今後もこのような機会に参加したいと回答した。一方で、終末期ケアに関する疑問・質問を発言することは難しいと感じていた。また、1 回限りの研修ではコンピテンシーを十分に高めるまで到達することは難しかった。更に、研修会で用いる事例は一般的なものだけでなく、多職種との間に生じるジレンマがより抽出できる教育主題を盛り込んだものに練り上げていく必要性もあった。今回用いた教育プログラムでは、小規模ゆえに参加者の発言を引き出し議論に乗せるファシリテーターの役割が重要である。今後、教育機会を定期的・継続的に実施するには、この役割をどのように示せばよいかという新たな課題が浮き彫りとなった。また、今回のような一職種での教育機会を継続させるべきか、多職種で学びあう IPE とするか、あるいは混合形式にするかなど、方法に関しても多角的な視点で検討する必要性を確認した。

以上 4 つの調査から、終末期ケアにおける多職種連携・協働を行ううえでの SWer の役割や必要となるコンピテンシーを確認できた。また、実際に教育プログラムを開発・試行した結果、このような機会を継続させる必要性が示唆された。教育機会は単発で提供されるものではなく、積み上げることが重要で、そのための仕組みづくりや教育プログラム開発を進めていかなくてはならない。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

上山崎 悦代、終末期ケアにおける IPW とソーシャルワークの機能、兵庫医療大学紀要、査読有、7 巻 1 号、2019、印刷中

上山崎 悦代、看取りケアにおける多職種参加型振り返りカンファレンスの実施と評価 特別養護老人ホームでの取り組みより、福祉社会開発研究、査読有、13 号、2018、21-30

上山崎 悦代、終末期ケアにおける多職種連携：ソーシャルワーカーの役割に着目して、査読有、18 巻 13 号、2016、82-84

上山崎 悦代、終末期ケアにおける医療ソーシャルワーカーの IPW：2 つのインタビュー調査から、日本福祉大学社会福祉論集、査読無、135 巻、2016 年、111-132

https://nfu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2730&item_no=1&page_id=4&block_id=73

〔学会発表〕(計 3 件)

上山崎 悦代、終末期ケアにおける IPW とソーシャルワークの機能 - 施設・在宅での看取りを支えるソーシャルワーカーに着目して -、日本社会福祉学会第 66 回秋季大会、2018

上山崎 悦代、宇佐美 千鶴、篠田 道子、看取り事例を用いた多職種参加型「振り返りカンファレンス」の成果 - 半年後の変化に着目して -、日本ケアマネジメント学会第 16 回研究大会、2017

上山崎 悦代、宇佐美 千鶴、篠田 道子、多職種参加による看取り事例の「振り返りカンファレンス」の実施と評価、日本ケアマネジメント学会第 15 回研究大会、2016

〔図書〕(計 1 件)

篠田 道子、原沢 優子、杉本 浩章、上山崎 悦代他、中央法規出版、多職種で支える終末期ケア - 医療・福祉連携の実践と研究、2018、140-158/206-216

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。